

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

実業家・子爵澁澤敬三と、その私塾「アチック・ミュージアム」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 雅樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009305

実業家・子爵澁澤敬三と、その私塾「アチック・ミュージアム」

近藤雅樹

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立民族学博物館民族文化研究部 教授

国立大学法人 総合研究大学院大学

文化科学研究科 教授(併任)



転機 —— 若き後継者 ——

澁澤敬三（1896-1963）は、明治時代の初期以来、日本の経済基盤を確立するために多くの功績を残した澁澤栄一（1840-1931）の嫡孫である。民間出身初の日本銀行総裁、幣原喜重郎内閣の大蔵大臣を歴任した財界人である。同時に、民俗学・民族学に造詣が深く水産史料研究にも携わるなど、自ら研究者として研鑽に励む一方、戦前戦後を通じてさまざまな博物館建設に関与し、巨額の私財を投じて数多くの研究者を支援し続けた。

旧制高校受験を控えていたある日、敬三は、祖父栄一の訪問を受けた。祖父は、羽織袴姿の正装だった。そして、19歳の孫の面前に端座し、平伏して懇願した。

「後継者になっていただきたい、頼む」

栄一は、写真に凝り、歌舞音曲の方面では玄人も舌を巻くほど技芸に秀でていた長男の篤二（1872-1932）を、「後継者の器ではない」と見限り廃嫡していた。そして、嫡孫の敬三に早くから望みを託していた。

少年時代の敬三は、邸内玄関脇にあった厩車の屋根裏部屋に仲のよい友だち（注1）を誘い入れては、瞳を輝かせて「博物館ごっこ」を楽し

んでいた。

「大きくなったら、生物学者になりたい」

そんな孫の夢を、栄一が知らないはずがなかった。以心伝心というべきか。互いに、つらくて苦しい心の内が、透けて見えるようにわかっていたはずだ。

敬三は、生物学者になる夢を断ち、祖父の懇願を受け入れた。

1915年、敬三の旧制二高英法科進学を期に、栄一は、澁澤同族株式会社を設立し、敬三を社長に任命した。この時点で、敬三は、対外的にも正式に栄一の後継者となったのである。しかし、この一件が伏線となって、敬三の生涯は、思いもかけない方向へと導かれていくのである。

二高を卒業して仙台から帰京した敬三は、東京帝国大学法科経済科に



(写真1) 「鯉を擔へる小兒」として登録された埴人形(標本番号H13276 国立民族学博物館蔵)。この土人形は、底縁部の内側に「新婚記念」"K&T SHIBUSAWA"と記されている。

入学、1921年に卒業した。そして、祖父が設立した第一銀行にではなく「他人の飯を食う」という建前で、横浜正金銀行(注2)に入行した。

もともと、実業界の大御所で華族(注3)である澁澤栄一の孫なのだから、実際は「御曹司様を(客分として)丁重にお迎えいたします」というのが、横浜正金銀行側の本音であっただろうことは想像に難くない。翌年、敬三はロンドン支店勤務を命じられ、数年間を海外で過ごすことになる。新婚までもない妻の登紀子も遅れて渡欧した。

あこがれていた生物学者になる夢を捨てて実業界に身を投じた。旧制中学以来の友人たちが相次ぎ大学に奉職し、少壮学者として活躍し始める姿を横目に、敬三は、悔しい思いを抱いたことが一度ならずあったかもしれない。それでも、敬三には、実業界に身を投じた後の人生設計を描き直すために忍耐し続ける気骨があった。学問への情熱は失せず、決してあきらめることはなかった。その点で、ロンドン赴任は、敬三にとって願ってもない好機の到来となった。赴任中は、休暇や出張があるたびに、欧州各地の美術館・博物館・野外博物館、また今日の世界遺産に登録されている遺跡などを歴訪している。

生来の魚好きが嵩じてか、敬三は、優れて生態学的な観察眼の持ち主だった。その観察眼を、無名の民衆が保持している基層文化研究に適用し、単なる民族学にはとどまらない独自の研究領域を切り拓いていくのだが、滞欧中に周辺諸国を旅行して得たさまざまな体験は、後の敬三の学問形成に大きな影響を与え、有意義に作用したのだった。

ふたつの経済復興 —— 祖父からのバトンリレー ——

世界的な大恐慌と両度の世界大戦下における軍部主導の独裁体制のもとで、日本経済は急速に、また極度に疲弊した。あげく、敗戦によってその機能を停止した。

第二次世界大戦中の1942年、敬三は、46歳という異例の若さで日本銀行副総裁に任命された。翌々年には総裁に就任、続いて戦後間もない10月に発足した幣原喜重郎内閣では大蔵大臣を歴任した。壊滅的な打撃を蒙った日本経済の復興に尽くすことになった敬三の立場は、奇しくも、発足間もない明治政府から囑望された祖父栄一の立場と、見事なほどに重なってみえる。

内乱により疲弊していた明治維新当時の国家財政は、債務超過に陥り事実上破綻していた。地方分権的な領国支配を前提にしていた幕藩体制から、神格化された天皇を頂点とする中央集権国家建設への移行は、円滑には進まなかった。士族授産も実効があがらない。各地で禄を失った不満士族たちの蜂起が相次ぐ内乱の時代にあって、新国家建設に不可欠な財政基盤を速やかに確立させる必要があった。そのような中、経済復興の陣頭に立ち、遠からず日本を欧米列強にも比肩し得る近代資本主義国家となすべき人物として抜擢されたのが、若き日の澁澤栄一だった。

旧幕時代の栄一は、討幕運動に荷担していた。それが発覚して逃れた京で、数奇な巡り合わせから、皮肉にも、一橋家の家臣に救われて仕える身となった。ほどなく、頭角を顕して重用され、一橋家の当主となる昭武の渡仏に際しては、主計担当の任務を帯びて随行した。そして、産業革命を経たヨーロッパの資本主義経済社会における資金運用の実情を実際に体験する機会を得た。帰国後の栄一が抜擢された所以である。

新政府のもとで、栄一は、その大任によく耐えた。国立銀行制度を発足させて「太政官札」など、新政府が発給した不換紙幣に対する信用の失墜と混乱の收拾に当たった。そして、わずかな間にこの問題を収束させて新政府を窮地から救いだしたのである。株式会社制度など、先進諸国が採用している企業経営方法の移植と確立にも、持てる知識と経験を活かして存分に経営手腕を発揮した。郵船事業や製紙業など、殖産興業政策を掲げて諸種の産業を牽引するために官が主導した重要な会社の

ほとんどの設立に関与し、資金面でも主要な株主となって運営に携わった。栄一が設立に関与した会社の数は、生涯を通じて500余に達したという。行き詰っていた青森県の三本木原野の開発を軌道に乗せるため、澁澤農場を経営するなど、国土開発にも尽力した。

日本が近代資本主義国家としての基盤を確立する上で、明治・大正両時代を通じ、一貫して重要な役割を果たした栄一は、その功績により華族に列せられた。

世界的規模の金融恐慌のさなか、1931年に満州事変が勃発。その年に栄一は没した。揺籃期以来、半世紀余をかけて育んできた日本の経済力が絶頂を迎えた、まさにその時期に生涯を閉じた。享年91歳。

喜寿を機に財界を引退した後は、婦女子教育や各種慈善事業に力を注いだ。軍部の大陸や南方侵出により険悪化していた欧米諸国との関係修復、親善交流にも積極的にかかわった。日米人形親善大使、いわゆる「青い目の人形」の功績は、今もなお、多くの人たちの記憶に残っているはずである。

日米戦争の勃発を強く危惧していた栄一が、どのような結末を予想していたか。それを推し測るすべはない。ただ、関東大震災の後にいち早く復興をとげたこの国の底力を実際に目撃していること、加えて当時の近代兵器の水準を鑑みるなら、夥しい数の焼夷弾と最新兵器の原子爆弾によって無残な焦土と化した国土の姿までは想像できなかつただろう。しかも、一敗地に塗れた占領下からの復興を、孫の敬三が担うことになるなどとも。

GHQは、矢継ぎ早にさまざまな戦後政策を打ち出した。武装解除はもとより、治安維持法の廃止、労働組合法の制定、民主主義的な平和憲法の制定に向けた策定調査、婦人参政権・公職選挙法の導入などを相次ぎ実施した。当然、その改革は経済面にも及んだ。何よりもまず、第一次世界大戦後の状況を教訓に、早急に急激なインフレの発生に対応する

必要があった。いち早く手を打った預金封鎖はその対策のひとつだった。農地解放と財閥解体は、GHQの指令がなければ実現しなかっただろう。それでもなお、敗戦国官僚の抵抗は根強く、さしものGHQも、天皇制の廃止は断念せざるを得なかった。目立たないが、所得税法の改革でも、GHQが強く反対していた「勤労者に源泉徴収を課す」という姑息な間接納税手続きの導入も阻止できなかった。すでに、予期していた急激なインフレの嵐が焦土の闇市を中心に吹き荒れていた。敬三は、祖父が奮闘したときとは比べようがない混乱のきわみにあった状況下で発足した敗戦処理内閣のもとで、至極困難な大任を押しつけられたのである。

財政破綻は、敬三が日本銀行副総裁に任命された時点で露見していた。最初は戦費補充のための紙幣乱発と赤字国債の発行、後には敗戦後の経済再建計画策定を見越しての起用だったのだが、当時の心境を、敬三は次のように語り残している。

「ありゃあね、東条英機に強姦されたようなものですよ。サーベルをね、こう、ガチャガチャやられてねえ」(注4)

その東条内閣が倒れた。もはや遅きに失していたが、戦争終結に向けた交渉が水面下で進み始めた。だが、陸海軍出身の小磯国昭・鈴木貫太郎両内閣がもたつく間に、原子爆弾の投下という人類史上初にして未曾有の大惨事を味わった。そして、ソビエト軍の参戦…。「終戦の詔勅」いわゆる玉音放送が流れて、ようやく空襲警報におびえることのない8月15日の夜が訪れた。

翌々日、鈴木内閣に代わる東久邇宮稔彦(なるひこ)王内閣が成立して速やかに終戦処理が進むかに見えた。ところが、10月9日、急遽大阪財界出身の文官・幣原喜重郎が総理大臣に指名され、新内閣が発足することになった。幣原内閣は、天皇が重臣に諮問する慣例を破って誕生し、GHQの意を受けて海軍大臣を差し替えるなどしている。天皇が就任を要請した総理大臣ながら、実質は、GHQが日本の非武装化と民主化を

推進するために必用とした傀儡政府だった。翌日、天皇による認証式が行なわれた。

幣原から直接「大蔵大臣に」と切望されたことは、敬三の経歴を考えれば当然過ぎるほど筋が通っていた。しかし、敬三は、最初これを断っている。栄一も、発足直後の大蔵省からの招請を一度は拒んだ。しかし、翻意した後は、両者ともに困難な局面を打開すべく職責を遂行した経緯もよく似ている。

夢と現実の交差 —— 敬三の生い立ち ——

澁澤敬三といえば、民族学をはじめ、諸分野の学問に対して展開したパトロネージが挙げられるのが常である。確かに、学問に理解が篤く、無私で開明的な資産家だった敬三は、私財を投じて多くの研究者を支援し続けた。敬三の支援がなければ、金田一京助も、柳田國男も、岡正雄も、宮本常一も、自らの学問によって今日の名望を成すことは、必ずしも容易ではなっただろう。しかし、傑出した経済的支援をもって第一の功績とみなすのは、間違いである。敬三自身が秀でた能力をもつ研究者だった。そして、逆境を顧みず理想の実現をめざして燃焼し尽くした、近代日本における稀有な啓蒙家でもあった。(注5)

彼が三田綱町の邸内に建設したアチック・ミュージアム(写真2)には、全国各地から実に多くの篤学者たち、少壮気鋭の学徒たちが参集した。その多くは、アチック・ミュージアムの同人として処遇され、階下に設けられた和室には、宿泊していく遠来の客が絶えなかったという。宿代無用で食事つきとあれば、それも当然だろう。併設されていた囲炉裏の間での談論風発。そこには、主の敬三はもとより、澁澤邸内に起居する書生たちの姿もあった。ほどなく、隣接して水産史研究室(写真3)の建物も落慶。そして、こうした人たちの調査研究活動の成果が、徐々に敬三の

投資した血と汗と資金の結晶である何十冊にも及ぶ彙報その他の刊行物、映像記録、民具のコレクションとして蓄積されていった。



(写真2) 『柏葉拾遺』(中山正則編 1956年 柏窓会・非売品)に収録されている「旧民具研究室」と題された写真。往年のアチック・ミュージアムは現存していない。同書には、外観を伝える別の写真もあり、建物の形態は改築によりかなり変化していることがわかる。南側に張り出した建物の2階部分の東と南に面した壁面は、白く塗りこめられていて窓がないが、建築当初は魚好きの敬三らしく、熱帯魚の飼育室だったため、大きな窓が設けられていた。



(写真3) 同じく『柏葉拾遺』に収録されている「旧水産史研究室」と題された写真。大蔵大臣の要職にあった当時、財産税の導入に伴い率先して広大な敷地と大邸宅を物納した後の敬三は、一時期、古川に面した崖下の使用人が使っていた小家に移り住んだ。その後、もとの水産史研究室を改造して寓居とし、晩年まで過ごした。

敬三は、実直に働く人たちが好きだった。翻って、自らが奉職せざるを得なかった銀行の仕事は大嫌いだった。週末、上野駅から夜行列車に乗り込んだとき、見送りに来た人たちに向かって、笑いながら「ざまあ見ろ」と言ったという。そんなエピソードも残る彼の週末旅行は枚挙に暇がない。業務に支障がないよう、月曜日の朝に帰京する夜行列車で

旅が常だった。宿は、降り立った地の農家などだった。そこで、炉端でくつろぎながら主の話を聞いた。敬三は、村人たちの信望が篤くて民俗知に長けた人たちに、深い親愛の情を抱いていた。その根源を探索するためには、彼の出自を繙く必要があるかもしれない。なぜなら、彼の実家も農業を営んでいたからである。

幼い頃の敬三は、栄一が新築した深川邸で過ごしていた。栄一は王子の飛鳥山に別邸を築いて移り住んでいたが、業務の増大に伴い、さらに兜町に新築した洋館に転じた。実業家としての手腕を発揮していたが、生家は武蔵国八基村（埼玉県深谷市）の平凡な農家だった。それが、同族から迎えた養子が藍玉商いで巨富を得て、質・貸金業にも進出し、一代で名主見習に取り立てられるまでになった。その二代目が栄一である。

十数家に分かれていた澁澤一族の歴代当主には、時宜に敏な起業家が多かった。一方では数奇者も多く、文人墨客はもとより、江戸から呼び寄せた遊芸の輩も時には出入りしていたという。評論家の澁澤秀雄、フランス文学者の澁澤龍彦も、この一族の末裔である。

こうしてみると、放蕩者呼ばわりされて廃嫡の憂き目をみた篤二は気の毒である。彼は写真に凝った。その写真術はプロの域に達するものがあったという。『瞬間の累積』と題された写真集をみれば、その技量のほどが判明する。(注6)

篤二が残した数々の写真は、澁澤家の人たちと、その血縁に連なる人たちの成長記録でもあった。澁澤家の総領として、自らの責務を自覚し、生物学者になる夢を断念した敬三は、父が成し遂げようとして果たせなかった想い、無念さを、痛切に感じていたのだと思う。元来、誠実で温厚な敬三を、学問のパトロネージへと向かわせた背景には、このような彼自身の生い立ちがある。

敬三は、祖父の業績を後世に伝える膨大な資料集の編纂も怠らなかった。『澁澤栄一伝記資料』(注7)である。後述する「実業史博物館」の

建設にも精力を注いだ。これらふたつの事業は、栄一のもとで書生時代を過ごすなど、栄一を敬慕する人たちが設立した「龍門社」に資金管理を委ねて進められた。

アチック・ミュージアムの創設 —— 学問の組織者が誕生した小部屋 ——

祖父の後継者となる意思を固めて後も、学問へのあこがれは払拭できなかった。仙台から戻った敬三は、再び邸内にあった付属舎の屋根裏部屋に着目した。そして、この屋根裏部屋を「アチック・ミュージアム」と名付けて陳列室とした。4坪たらずの小さな博物館だった。しかし、ここを拠点にして学術同好会の結成をはかり、新たな標本資料の収集と調査研究の実践に向かい始めた。

この同好会は、大学卒業を間近にした1921年2月に発足した。初会合には7人が参集した。内山敏、清水正雄、鈴木醇、田中薫、中山正則、宮本璋、そして敬三である。この同好会は「アチック・ミュージアム・ソサエティー」と命名された。そして、自分たちの干支にちなんだ玩具や縁起物類を中心に、玩具の収集調査を共同研究テーマに掲げて活動し始める。もっとも、すぐに休眠状態に陥った。翌年に敬三が渡欧し、会員たちもそれぞれ就職するなどしたためである。しかし、1925年8月に敬三が帰国すると、本格的な活動が再開される。

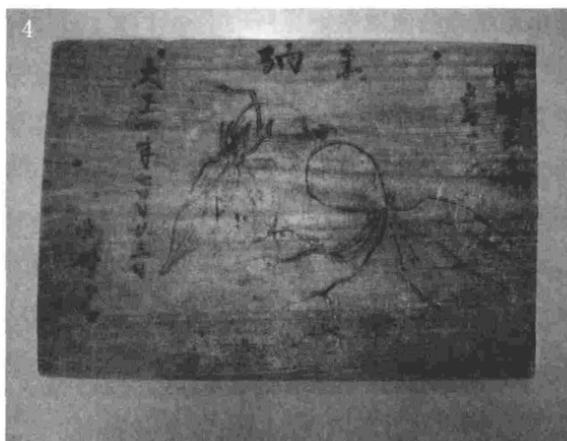
同年12月の復興第一回会合には、鈴木醇、田中薫、宮本璋、澁澤敬三、江木盛雄、小林正美、佐藤富治、佐藤弘、渡辺尚一の9人が集まった。初会合の時とは若干顔ぶれが異なっている。アチック・ミュージアムの後身である神奈川大学日本常民文化研究所に、往年の資料台帳が2冊保存されている。『おもちゃ箱原簿』と題されたその第1冊目の中扉には「同人」として10人の名前が連記されている。内山敏、江木盛雄、佐藤富治、佐藤弘、澁澤敬三、鈴木醇、田中薫、小林正美、宮本璋、渡辺

尚一である。中山正則と清水正雄の名前はない。

狭い屋根裏部屋に集まって、彼らはどのような議論を展開していたのだろう。後世に大学教授や文学者などとして活躍することになる人たちの名前をみると、学問への絶ちがたい思いを抱いていた敬三の心情がわかる気がする。また、私設博物館兼研究所と同好会を発足させた当初から、共同研究を意図していたことは注目に値する。敬三は、敗戦の翌年に日本民族学協会会長に就任すると、直ちに「六学会連合」（注8）を組織し、離島を中心に学際的な総合調査を何度も実現させた。そのビジョンがすでに芽生えているからである。

最初に取り組んだ玩具研究を推進するために、敬三は、澁澤家に寄宿していた藤木喜久磨をアチック・ミュージアムの初代管理人に任命した。そして、資料整理にあたらせるとともに、全国各地の郷土玩具を収集するため、寺社の縁日や祭礼の場に派遣した。現在確認できる藤木収集の玩具は500点を超えている。台帳に記載された地名から、藤木は数年間に青森県から沖縄県まで、29府県を経巡ったことがわかる。藤木は、玩具以外にも、伊豆諸島に特徴的な衣食住に関する道具もかなりの数をもたらした。

玩具研究は、しかし、1930年頃にほぼ収束する。芳しい成果を挙げられなかったからだが、これより少し以前から、新たに加わった早川孝太郎、宮本馨太郎、高橋文太郎たちを中心に、藤木が収集してきたような日常生活とかかわりの深い道具の比較研究に関心が移行したためでもあった。以後、アチック・ミュージアムでは、敬三が「民具」と命名したこれらの資料の本格的な収集と調査研究に向かって動き出す。（写真4、5）1930年には、屋根裏の小部屋を出て、新築された木造二階建ての建物に引っ越した。



(写真4) 病気治癒祈願の小絵馬 (標本番号H19354 国立民族学博物館蔵) 地元で「イボガミ」と称していたことから、疣(吹出物)が治まるようにと疣神に奉納祈願したものだったことがわかる。1937年5月、燈灘に浮かぶ魚島(愛媛県)で採集された。



(写真5) 石造地藏尊 (標本番号H15711 国立民族学博物館蔵) 1931年6月の津軽半島調査の折に採集されたもの。地元では「ケサコ」と呼ばれていた。

最初は、模索しながら脈絡のない収集が行われていたが、まもなく、敬三の発案により、特定資料の研究に着手するようになって、組織的・計画的な収集がはかられた。その結果、アシナカ(足半草履)や、ウケ(筥)、背負運搬具などの研究が進んだ。中でもアシナカ研究は、宮本馨太郎ら、若い同人たちが著した『所謂足中(あしなか)に就いて(豫報)』(注9)によって、学史上に特筆される成果をあげた。ウケの研究は大里雄吉が中心となり、運搬具は磯貝勇らが研究に携わった。しかし、大陸部での戦況が深刻化する中、アチック・ミュージアムの活動を維持することは困難となり、研究は中断する。

敬三が主宰したアチック・ミュージアムは、民具の研究以外にも、民間の習俗に関する調査報告書も数多く刊行した。その中には、敬三の発案を機に調査に着手した結果であるものが少なくない。『塩俗問答集』(注10)はその一例である。また、敬三は、生活者自身による生活記録

の刊行にも強い関心を示していた。吉田三郎の『男鹿寒風山麓農民日録』（注11）、進藤松司の『安芸三津漁民手記』（注12）などは、敬三という開明的な研究者・庇護者がいなければ世に出ることはなかった。敬三に促されて、生活者自身が描出した民俗誌である。

敬三の学問に対する考え方は、当時としては型破りだった部分がある。しかし、資料・史料に忠実であるべきことの重大さを、敬三は知悉していた。だからこそ、博物館を研究基盤として位置付けたのである。現地における収集調査により得られた資料を標本として保存・公開することにより、誰にでも平等な研究機会を与えることが可能な施設が博物館だからである。敬三の博物館に対する思いの深さは、ひとしおではなかった。

1932年、敬三は、アチック・ミュージアムに隣接して水産史研究室を新築した。木造平屋造りの建物だった。そして、祝宮静をリーダー格として招き、桜田勝徳、山口和雄ら大学を卒業したばかりの若い研究者たちを迎えて所員とし、水産史料や漁民史料の研究にも着手した。水産史研究室の設置は、療養中の伊豆内浦で、同地の網元に伝えられていた「大川家文書」に出会ったことが契機になっていた。当時、漁民の事績に関する、いわゆる浦方文書の調査研究は、ほとんど未着手の状態だった。敬三は「大川家文書」の翻刻と刊行には、アチック・ミュージアムに集う研究者たちだけでは無理だと判断したのである。5年後、この文書の全容は『豆州内浦漁民史料』（注13）として公刊された。

戦中戦後という未曾有の激動期に、日銀総裁や大蔵大臣を歴任していた時期にあっても、多忙な公務の間を縫って、生涯、学術的な研究にいとそしんだ敬三の熾烈な思いが、その後どのように結実し、評価されてきたか。戦後も「ミナカタ・ソサエティー」を設立して『南方熊楠全集』全12巻（注14）を刊行するなど、学術振興に果たした功績には、余人の追隨を許さない幅広さと奥行きがある。

最後に、澁澤敬三と博物館をめぐる事柄をもう少し書き留めておく。敬三が設立に関与した博物館が少なくないからである。

アチック・ミュージアムのコレクションは、1938年に日本民族学会附属民族学博物館に寄贈された。その資料総数は約10,000点だった。この民族学博物館は、野外博物館の一部として構想されていたもので、学会附属民族学研究所とともに設置された。敬三が、資料ばかりか、土地と建物を手配し、宮本馨太郎や小川徹など、アチック・ミュージアムの若くて有望な同人たちを研究員として提供し、ようやく開館にこぎつけた。1939年のことだった。アチック・ミュージアムは敬三のプライベート・ミュージアムだったが、これにより、そのコレクションは公共のものとなり、公開された。民族学博物館に関しては、敬三は、その設立を国にもはたらきかけてきた。その努力は、死後十数年を経てようやく報われた。それが、今日の国立民族学博物館である。(写真6、7) かし…。

敬三の構想では、それは、野外博物館と一体化していた。今和次郎にその全体計画を描かせた図面が残っている。(写真8) 広い敷地内には、大型の民家を含めて50棟近い建物が配されている。その一部は実現していた。北海道から呼び寄せた二谷兄弟によってアイヌの民家(チセ)が建設された他、奄美大島の穀倉や、武蔵野の民家などが移築された情景写真も残されている。(写真9)

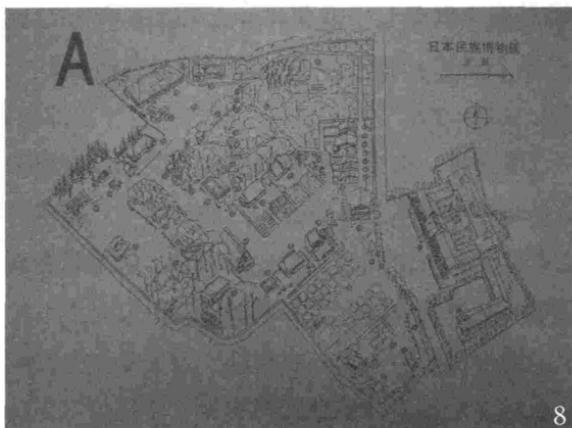


(写真6) 国立民族学博物館（大阪府吹田市の万博公園内）。1977年に開館した。

(写真7) 国立民族学博物館の常設展示場内「日本の文化」コーナーに陳列されているアチック・ミュージアム旧蔵資料から、背負い運搬具コレクション（国指定重要有形民俗文化財）の一部。



(写真8) 「日本民族博物館全景」と題された鳥瞰図。1940年以後に今和次郎によって描かれた完成予想図。東側のもっとも大型の建物が本館（民具陳列室・収蔵室）、L字形に伸びる建物の一部が研究棟。屋外部を含めた総敷地面積は約3,500坪。国に設立をはたらきかける資料として作成されたと考えられる。しかし、実際に開館した時には、当初計画していた面積よりはるかに縮小したため、大幅な変更を余儀なくされた。なお、本図は「高橋文太郎の真実と民族博物館一埋もれた国立民族学博物館前史一」（2008年 西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会 代表：高田賢）から、発行者の了解を得て転載したものである。



(写真9) 公開されていた当時の野外部。奄美大島の穀倉とアイヌの民家（チセ）の姿を認めることができる。他に絵馬堂、水車小屋、竪穴式住居などがあった（写真提供：西東京市中央図書館）。

大阪府豊中市の服部緑地公園内に（財）日本民家集落博物館が開設した際にも、敬三は名を連ねていた。野外博物館兼民族学（民俗学）博物館へのこだわりは、彼自身の生態学的な思考を前提としているが、赴任先のロンドン滞在中に訪れたストックホルムの「スカンセン」がモデルになっている。

もと澁澤家の執事だった杉本行夫が、三沢市内に小川原湖民俗博物館を開設したときにも、同じく杉本が尽力した十和田湖科学博物館の開館にあたっては、敬三は協力を惜しまなかった。この他、敬三は、実業史博物館建設の準備も着々と進めていた。これは、先にふれた『渋沢栄一伝記資料』の刊行と表裏一体の事業だった。日本の実業発展に貢献した祖父の顕彰を主眼としながら、近世以来の商業・流通関係資料を網羅する内容で、資料の多くは道具商を動員して収集につとめていた。しかし、実業史博物館は、地鎮祭を済ませたものの、戦況の悪化によって建設が頓挫し、ついに実現しなかった。

生物学者にあこがれていた敬三は、中でも魚類に明るく、釣りが趣味でもあった。そのようなことから『日本魚名集覧』（注15）や『日本釣魚技術史小考』（注16）なども著した。関連して「延喜式」に記載された御餉物をはじめとする諸国の朝貢物の研究にも没頭していた。そして「延喜式」に著された、水産物をはじめとする食物加工技術などを再現し、平安時代の暮らしぶりを示すための「延喜式博物館」を建設できないものだろうか、晩年まで真剣に考えていた。

澁澤敬三の学問とパトロネージは、常に庶民生活の調査研究と博物館建設に結びついていた。アチック・ミュージアムを拠点に始めた活動は、その出発点だった。澁澤同族株式会社社長としての配当金、複数の銀行と企業から得た役員報酬など、生涯を通じて得た収入のほとんどを、学術活動を継続し、支援するために投じ続けた。

ちなみに、敬三は、アチック・ミュージアムの経理は複式簿記で処理

させていた。さすが、銀行マンらしい。そして、大枚の小切手をポンと手渡すようなことがあった反面、経理の合理的な運用には細やかな注意を払っていた。アチック・ミュージアムが発行していた『アチックマンスリー』を子細に読むと、敬三の週末旅行には、宮本馨太郎や小川徹など、若い在京の同人たちがよく同行していたことがわかる。子爵の敬三は別として、彼らは皆、寝台車を使うことはなかった。研究支援に注ぎ込む資金を浪費しないよう、締めるべきところは締めていた。アチック・ミュージアムの同人たちは、決して甘やかされていたのではなかった。

敬三が学問のパトロネージに注ぎ込んだポケットマネーの総額は、本当ははかり知れない。ただ、ひとつの目安を与えてくれる晩年のエピソードがある。

九州を旅行中に倒れ、病床にあった彼を見舞いに来たある人が、「先生は、これまでにどれほどの援助をしてこられたのでしょうか」と、尋ねたというのだ。

問われた敬三が言った。

「さあね、10億かな」

私には、この金額が決して誇張されたものだとは思えない。何ごとにつけても、謙虚で温厚な彼の性格からすれば、むしろ、控えめな回答ではなかったかとさえ、思うのである。

1963年10月25日。敬三は還らぬ人となった。享年63歳。世間の人たちは、こぞって「三種の神器」を買い求め、翌年に開催される東京オリンピック特需に沸きかえていた。敬三が、大蔵大臣として大鉦を振るって活路を拓き、焦土に撒いた経済復興の種が稔り始めていた。

写真提供・協力

西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会 代表：高田賢(写真8)

西東京市中央図書館(写真9)

渋沢史料館(写真2、3)

国立民族学博物館(写真1、4、5、6、7)

(注1) 鈴木醇と宮本璋。旧制中学以来の友人だったふたりは、ともに大学で教鞭を執った。

(注2) 今日、その建物は神奈川県立歴史博物館(旧館)として機能している。

(注3) 1900年男爵、1920年子爵。

(注4) 「昭和財界史」(NHK教育テレビ教養特集『日本回顧録』1963年1月14日放送)

(注5) 『澁澤敬三著作集』全5巻(1992~93年 平凡社)には、アチック・ミュージアムの同人たちを伴って民俗資料の探訪調査を実施したときの記録や、水産史料に関する論文、国内外各地を歴訪した際の随筆、身近な人たちや事象に関する折に触れての随筆など、彼の主要な著作が網羅されている。

(注6) 『瞬間の累積—澁澤篤二明治後期撮影写真集』(澁澤敬三編 1963年 非売品) 篤二が遺した多くの写真は、敬三により編集・刊行された。父の三十三回忌供養のために企画されたものだが、同時に、敬三にとっては死出の旅路への土産となった。

(注7) 『渋沢栄一伝記資料』全68巻(渋沢青淵記念財団竜門社編 1955~60年 渋沢栄一伝記資料刊行会)

(注8) その後、1951年には九学会連合となった。

(注9) 『所謂足中(あしなか)に就いて(豫報)』(アチックミュージアム編 1936年)

(注10)『塩俗問答集』(アチックミュージアム編 1939年)

(注11)『男鹿寒風山麓農民日録』(アチックミュージアム編 1938年)

(注12)『安芸三津漁民手記』(アチックミュージアム編 1937年)

(注13)『豆州内浦漁民史料』全3巻(アチックミュージアム編 1937
~39年)同書の刊行により、敬三は1940年に日本農学会の農
学賞を受賞した。

(注14)『南方熊楠全集』全12巻(澁澤敬三編 1951~53年 乾元社)

(注15)『日本魚名集覧』(第1部 1942年、第2部 1944年 アチック
ミュージアム)

(注16)『日本釣魚技術史小考』(1962年 角川書店)